

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4360290003		
法人名	有限会社 あい		
事業所名	認知症対応型共同生活介護 グループホームあい		
所在地	熊本県八代市島田町863-3		
自己評価作成日	平成29年9月1日	評価結果市町村受理日	平成29年12月25日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	平成29年9月19日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

これまで出会う事のなかった方々と、であり人生に向き合い、個々の自宅ではないけど、ここ(あい)で自宅で過ごしている様な事(出来る事)をゆっくりみつけ、自信を取り戻し、その方の”我のまま”の暮らしの実現を日々追いつけています。希望に応じて最期の時間を過ごさせて頂き看取りをさせて頂いていますが、最期 利用者さんが目を閉じられる瞬間まで、本人、家族の思いを添い遂げられるように、しっかりスタッフの思いや考えも大切に、何事にも努力を惜しまない事業所です。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

入居者・家族・地域をはじめホームに関わる人々、これからご縁のある方々との、『であい、ふれあい、支えあい、慈しみあい』の心をもって取り組んでおり、「我のまま」の時間が自然に流れている。代表者や施設長は、常に入居者や家族の思い、職員の疑問などホームの現状を把握しながら、理念やチームワークを持ったケア、人としての看取りを考える研修など身近な課題に沿って取り組み、ホーム名にふさわしい事業所となるよう日々努力している。民家型のホームであり決してスペースや使い勝手などハードの面では十分ではないが、入居者の残存能力を生かしながら職員も使いやすくなるような改善を行ったり、目配り・気配り・笑顔で安心と活気ある日常を支援している。今後も積み重ねた信頼と経験で介護を必要とする入居者・家族を支えていられることを大いに期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○			

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	施設長・管理者ともに日々のケアとして理念を捉え、入居者の“らしさ”や“わがまま”を引き出し、ケアに反映するよう指導し、実践に繋げている。今後もしっかりと心してケアに繋げていきたい。	法人理念とともに「我のままに暮らせる」をホームの理念として、チームワークについてアンケートを基にした話し合いや、ケアの中で入居者のことを発見できる小さな楽しみを持つ事等具現化して職員に示している。入居者はもちろんのこと、職員同士も思いやりや愛情を持ったケアの実践にまい進するホームである。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に加入し、町内の美化作業や祭りへの参加はもとより、月2回の資源の日を活用し地域住民の方々へスタッフ一人一人を知って貰うようにしている。地域住民と共に地域自主防災への参加している。	開設して16年目、地域の中に息づいたホームであるが、町内会長の変更に伴い、信頼関係の再構築を目指し、地域の中に積極的に向かっている。町内の祭り参加、自主防災では町内会とともにホームでの訓練を企画している。また、毎月「さくら会」と称する予防教室を開催し、住民との交流を行っている。近隣住民からの野菜の差し入れや、ホームも美化作業に参加する等地域の一員として活動している。	地域防災の拠点として、備蓄品を用意し地域にも還元できることが発信されている。地域と共にあるホームとして大いに期待されるホームである。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	「さくら会」は認知症予防の観点から、月一回地域の方々の要望や実施したいことを行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議の中では、活動報告を写真で紹介。スタッフの研修参加状況や消防訓練救助活動、暮らしのミニ知識講座を取り入れている。介護専門用語等の際は、研修に参加したスタッフが質疑応答をする機会を設けている。	町内会長・民生委員、地域包括支援センター、ご家族、評議員等をメンバーとして2ヶ月毎に開催する運営推進会議は、利用者状況や活動を説明した後、質疑応答を行っている。行政の考え方を質問されたり、地域包括支援センターからの情報提供、災害時の避難方法の意見交換や火災を想定した避難訓練等工夫しながら開催しており、地域住民と行政との接点としての役目を果たしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	二カ月に一回運営推進会議を通し、市の担当者や包括支援センター職員に参加してもらい、会議の中で地域、事業所、包括、市それぞれの意見を言えるような雰囲気を中心掛けている。	運営推進会議の中でホームの現状を積極的に伝えるとともに、地域包括支援センターが実施する会議（圏域の地域密着型施設が参加）や行政も連絡協議会に参加される等良好な関係である。市担当者も参加を得たブロック会議では、身体拘束についての話し合いの場でマニュアル作成を打診する等それぞれが連携を図り、意見等が言える関係性を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	研修は社内外通し実施しているが、研修で得た知識を、日々のケアの中で実際に実践できているかを個々で振り返り、研修に参加できないスタッフについても報告書で、共通認識への統一を図っている。又ケア中疑問に思ふような行動が生じた場合時間を取り、意思確認を実施している。	ホーム内外の研修により再確認しており拘束の弊害は全員が正しく認識している。また、日々のケアの中で「どこへ行くの」とつい出る上がり時の言葉使い等事例を通して注意喚起している。入居者の帰宅言動には目的があると捉える等、一人ひとりの傾向を把握し、職員が付き添う等抑制の無い自由な生活環境を整えている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	社内外での研修の実施、又日々のケアの中で異変や違和感を感じた際は、注意し研修や事例を通して自己に置き換えて考え実践にむすびつけてもらうようにしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護を日々のケアの中で実践できる、意識して実現できるような支援の実現に取り組んでいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際は、しっかり時間をとり契約を交わしている。改定時には改定内容を分かりやすく、請求書と一緒に送付している。又面会時にも説明を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時や運営推進会議や行事などの機会を利用して。特にケアプラン変更時・更新時の担当者会議では家族の意見を聞く大事な時間として捉えている。又どうしても話せない様な場合は、国保連などの連絡先を伝えている。	家族には日常の様子を個別に便りとして情報発信している。家族の面会が多く、訪問時やプラン変更時、急変時等家族の意見や要望を聞き取る他、家族と一緒に考えてたり、ホーム側から相談している。また、年1回は家族会を開催している。運営推進会議や家族がホームへ言いだしにくい事案などは苦情相談窓口を説明している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年度初めに運営に関する、会議をし、個々に応じた面接に実施。	代表及び施設長は事業所設立への思いやこのような事業所でありたいと会議の中で発信し、施設長による個人面談の中で意見や要望を聞き取りしている。管理者は24時間職員との連絡体制をとり職員と話し合い、出された事案は管理者を通じて上申し、職員の表情等により個人面談を行ったり、不定期ではあるがホームで会議を開催する等職員が意見や提案をする機会を作っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個人面談などを通して、すり合わせを実施している。職場環境が改善が必要な場合は、可能な限り考慮し実施している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	社内外の研修は個々に応じて、参加出来る様に配慮している。又個人面談を通し、目標の達成への実現、役割実践を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	毎月他3同事業所と合同で意見交換が出来る勉強会を実施し交流を図っている。又他21同事業所合同での勉強会への参加を実施している。又包括支援センター主催の圏域事業所との意見交換会にも参加している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に面会を行い、入居時には入居する事をしっかり家族の方より話してもらう事で、これから暮らしていく上での困りごと等を引きでしやすくしている。又ケアスタッフは、専用シートに日々の暮らしの中から引出した要望を共有し、誰がケアしても不安を感じない様な配慮をする。又夜勤には一人待機者をつけ、場所や不安への対処が細やかに出来る様にしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居時プランを通し、ケア担当者会議の中で、家族の思い、家族の苦悩などを引きだすようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	電話相談や見学では、しっかり話を聞くようにしており、事前入居申し込や他事業所の紹介も行っている。又担当ケアマネへ情報の提供も行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	毎月の請求書の中に、本人の写真や行事予定などを配布し、面会時どのような場面の写真が良いか又家族と担当スタッフとのコミュニケーションになっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時はなるべく家族と並んだ写真を撮るようになっている。又面会時家族だけの時間を設けたり、時にはスタッフが共に会話の橋渡しをして面会時間を大切にしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	可能な場合は、馴染みある理髪店や美容室の利用。お盆やお正月は家族の協力のもと外出、外泊への働きかけをしている。又家で行っていた行事ごと等個々の慣れ親しみ事を探し実施している。	入居者がこれまで培ってきた関係性が途切れないよう、自宅近くの理髪店の継続した利用、職歴を踏まえた仕事、食への関り(団子づくり等)、編み物、糸通し等出来る力を引き出しながら支援している。盆・正月の帰省や外出、神社参拝、四季折々の行事や家族での米寿祝い等家族の協力も得ながら支援している。入居者同士の関係性も食事での声掛けに表れており、新たな馴染みの関係が出来上がっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	移動動作が介助を有する方が多くなってきたが、側を通る時には、双方が声を掛けられる環境を作ったり、座る場所、相性の良い方の配置等を心掛けている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	年賀状や初盆や年忌法要時など、可能な限りつながりを持っており、ご家族の方が、新たにご紹介して頂いている。今でも足を運んでいただくご家族もいる。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ケアプラン更新時・変更時本人に聞く機会を持ち出来る事への支援を検討している。自己意見が困難な場合は、日々のケアの中で考えられる事柄を考え、様々な情報をもとに本人本位への実現を目指している。	入居者本人の意思の確認は本人の希望に応じたいとして、できる事・できないことを見極め無理強いしないよう努めている。日々本人本位になるよう、生活リズムに合わせたり、言葉での表現や意思疎通が困難な状況、特に自分らしい生活について職員が考えながらケアを行っているかは不安もあるなかで、入居者個々の“らしい”生活を目指し支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に専用シートを用い、家族から情報を書き入れてもらい、部屋の配置や暮らし時間を調整し、本人の生活パターンに応じて、声掛けのタイミングなどを計るようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居時、プラン更新時、専用シートを用い、担当スタッフが本人の一日を掘り起こすようにしている。又日々変化が生じるときは記録に詳しく記載し、又連絡帳でも共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	状況に応じ計画追加や変更もある。又ケアプラン更新時・変更時には、本人がよりよく快適に過ごせるように、プランに反映している。	本人・家族の要望を踏まえた介護計画が作成されている。担当職員による評価を踏まえ話し合い、継続可否を見極めたり、継続でも話し合いを重ねながら本人らしいプラン作りに努めている。毎日プランを実施したか記録をすることで、日々のケアへの反映と、プラン変更反映させており、事由によっては援助内容を追書する等現状に即したプランである。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケアプラン実施に伴い気づきや変化は、記録に残している。又継続したケアが必要な場合や、特に注意しておきたい事には青ペンでアンダーラインで示している。また連絡帳での追記での共有もしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者さんが自宅に行きたいという願いを、ドライブを通して実施したり、買い出しに同行したり、筋力低下防止に機能訓練したり、日中活動の中でレクリレーションや集団での歌の時間を設けている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営推進会議の中で、外出の可能性がある利用者さんについては、本人を紹介したり、交流が出来る様に工夫している。又地域の防災自営組織に入り、共同での実施協力を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前からのかかりつけ医や個人に応じた往診可能な医師の選択、看取り医等状況に応じて、本人の負担にならない様配慮している。又病院同行は家族に願い必要に応じて職員の同行にしている。情報提供も実施している	本人・家族の希望するかかりつけ医を支援している。現状は往診可能な医療機関を選択される方が多く、ホームでも状態に応じ看取り支援に対応できる医師を検討している。ホームは毎日の検温や必要に応じ、朝夕の血圧測定を行う他、週1回訪問看護による健康チェックを行っている。また、日々共に食事を摂ることで間近に表情や食欲、嚥下力など些細な変調に気づくことができている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	施設長・管理者が24時間体制で相談・対応可能にしており、連携している訪問看護師との情報共有を一週間に一回必ず行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	認知症というだけで、病院では抑制や拘束が常習化している為、ホームで可能な治療で有れば訪問看護を利用して、早期に退院可能である事を家族、病院にもしっかり説明を行い早期退院を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居の際に、終末期の指針の説明を行っており、年に一回、終末期の意見書の提出をお願いしている。又状況に応じて都度に応じて、しっかり慎重に話す機会を設けている。	入居時に終末期支援に関する指針をもとに説明を行う他、延命や急変時の対応について年1回書面で確認している。また、家族の思いは変化するものであり、変更があっても構わないことや何かあれば何時でも相談して欲しいことを申し添えている。代表による『人としての看取りを考える』という研修が行われ、看取り期間中は家族や友人が訪れやすい雰囲気をもっと心がけることなど、一つひとつの場面についても共有が図られている。	直近では襖のある我が家のような居室で、看取りが行われている。時間の許す限り家族の面会や皆の声が聞こえるよう少し戸を開けたり、外の景色や風を感じてもらうなど細やかな取り組みや状況を聞き取りからも確認された。今後も『あい』にできる最良の支援を継続されることを願いたい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	119連絡方法は毎月勉強会で実施しているが、救急時の対応は、実践力とまではできていない為、予想できる範囲での、気を付ける事はプランで上げている。施設長・管理者は24時間体制での電話対応に応じている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年二回の防災訓練の実施。運営推進会議を利用して地域の方の救助訓練も実施。今年度は熊本地震での経験を活かし再び避難訓練を実施予定。	災害対策については研修会や、年2回の防災訓練、運営推進会議を利用し、地域の方との救助訓練を実施している。昨年の震災では安全対応として家族へも自宅への帰省などの協力を依頼している。協力のあった家族からは、本人の現状を知る機会となったなど感想が返っている。また、ホームの建物の耐震について安全性など家族へ説明を行っている。備蓄については法人の空家スペースに確保しており、有事の際には地域への協力もできるとしている。	今後、地域に認知症の啓発を通して災害時の避難訓練への協力を呼びかけ実施したいとしており、実現に期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	状況に応じて、本人の好む呼び名を工夫したり、イントネーションや人等を変化しながら、対応など工夫している。	呼称は本人の希望や安心される呼び方など家族の了解を得、個々に応じて決定している。尊厳やプライバシーに関する研修会も実施し、一人ひとりにゆっくり関わりながら本人を知ることによる最良の支援につながる事を、施設長や管理者は指導している。難聴気味の方にトイレ誘導を行う際、声の大きさよりもさりげないサポートから、日常のコミュニケーションや信頼関係を窺い知ることができた。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	表現できる方は希望を聞き入れることは、可能だが表現が難しいようであれば、二択で選択してもらったり、働きかけを工夫している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員の力量で出来る日と、出来ない日の差がある。現在差を埋める為、職員の個人面談を通してすり合わせている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	訪問カットでは、事前になが家族の意見を聞くようにもしている。又二択選択で衣服を選んだり、マニキュアの機会もある。外出時には、家族と共に衣服選びの時間もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	共同空間で、料理の音、香りを楽しむことが出来る。味見や下ごしらえ、可能な限り個人の役割がなされている。嗜好に関しては、事前情報に基づき提供している。	ホームでは季節や入居者の希望を確認しながらメニューを決定しており、精肉・鮮魚は地元商店を利用する他、牛乳や生食できる卵など安心・安全にもこだわりをもって提供している。また、箸は地元の名産日奈久の竹箸が使用されている。献立や入居者が食べ関わる様子は、広報誌や来訪時に家族へ伝えており、安心にも繋がっている。訪問当日も入居者の希望の団子汁が好評で、食後も大きな冬瓜を一人ひとりに回しながら、重さを確認したり調理方法を尋ねるなど終始賑やかな時間であった。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	メニューは固定していないが、一食の中での蛋白質はしっかり入るよう意識して調理している。食事表に基づいて、捕食等調整し、摂取出来なかった要因(味・硬さ・食感等)を探るようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	個人に応じた歯ブラシの選択。残菌の状況に応じて3本の口腔専用ブラシを使用している。毎食後実施。義歯は夜間帯消毒の実施。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	どのようにしたら、本人にとって快適なのか？を良く考えている。日中のパット減を目指し下肢訓練を実施したり、肌触り、吸収性などをよく考え実施している。	職員は排泄支援も快適なホーム生活の重点であることを共有している。日中は布パンツを中心に支援し、夜間はトイレ誘導やリハビリパンツ、布と尿とりの併用など使い分けしている。また、布パンツでも排尿ができるよう、午睡時はパットを使用するなど最良の支援を個別で検討している。トイレはリビング食堂と隣接している箇所もあり、特に臭気や清潔さなどにも十分配慮している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	起床時、牛乳や豆乳を飲用してもらっている。また食物繊維の多い食材を意識して調理している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	個浴の為、必ず一番風呂を楽しんでもらっている。時には入浴剤を楽しむ事を実施している。急な汚染時には、すぐに対応している。	入浴は健康状態を確認しながら、週3回以上支援し、汚染時はシャワー浴で早急に対応している。着替えの選択や準備も本人と一緒に確認しながら行われている。個浴であり職員は湯加減を尋ねるなどゆっくり関わっており、菖蒲湯や時には入浴剤も使用し季節や香りも楽しんでもらっている。また、衛生管理の一つとして年2回レジオネラ検査を実施している。	日々の掃除と合わせ、浴室の窓棚をスッキリ整頓することで、採光もよく更に寛げる浴室環境になると思われる。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人に応じて、午睡の時間を設けている。午睡を実施する事で、日中活動も活気が出てきている。週に2回程度の寝具干しやリネン交換を実施している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬準備は必ず、服薬剤名の確認を実施している。又内服変更時には、情報を共有し記録を残している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の中で、ふとしたきっかけで、喜怒哀楽を記録に残し、少しずつ実現できるように、心掛けている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天候が良い日には、デッキでのおやつやcafé風にセッティングしたり、玄関先の花を愛でる時間など大規模な外出よりは、日々の中での散歩を心掛けている。家族とは月一回か2カ月に一回の受診時の外出をお願いしている。	ホームでは計画的な外出よりも、外気浴を兼ねデッキでお茶の時間を楽しむ機会や、近隣の散歩など身近な外出支援に取り組んでいる。また、神社参拝や祭りなど本人が住んでいた地域へ可能な限り出かけるようにしており、自宅近くへのドライブを行った事例もある。家族には受診同行など、外出にも繋がる協力を依頼している。管理者は今後も、入居者の状況に応じて、戸外に出る機会を作っていきたいとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ほとんどの方がお金への関心が無い。会話の中で高額なのか低額なのかの会話は、常時出来ている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	少しでも、関わりが出来る様に、年賀状作成には制作したハガキを送っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室や共有部分ついて、極力臭いに、気がけている。トイレは職員と共有する事で、汚染時にすぐ対応できる。又季節柄、夏には緑緑した稲穂を眺め、秋には稲刈りが見える。又季節に応じて、ソファの位置や食卓の位置が変更する。	共用空間は臭気なく、特にリビングのテーブル配置は、季節や関係性を考慮して決定し、安心や居心地よく過ごせるようにしている。また、畳の間で寛がれる方も多く、夏場はグリーンカーテンによる遮光や成長を楽しまれている。訪問当日は彼岸花や家族から入居者に敬老を祝う生花アレンジメントが飾られ、和やかな空間となっていた。ベランダのデッキは、周辺の稲の様子を眺めるなど外気浴やお茶の時間にも活用されている。	テーブルには入居者と一緒に造花を使って、小さなアレンジメント作品も置かれている。今後も散歩中に摘んだ草花を飾るなど季節感が伝わる空間作りに期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	玄関から、縁側まで様々なところに、椅子やソファを設置している。気分に応じて場所を変更することが出来る。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	以前は実施していなかった、衣替えを担当スタッフを通して実施している。一緒に実施する事で家族の方がサイズを知り、購入して頂く機会が増え、又面会の機会が増えた。	広さや趣の異なるそれぞれの居室は、安心して過ごせるよう、必要な家具やキャラクターグッズなど好みの品が持ち込まれている。衣替えにおいては家族にも協力を依頼することで、面会の機会が増えたり、あらためてサイズを知るなど相乗効果に繋がっている。掃除や天候の良い日は特に換気に努め、エアコンも衛生的に管理し掃除の様子を写真に残し家族へ報告している。居室は面会の家族とひと時を過ごす場所でもあり、居心地よく過ごせるよう様々な工夫を行っている。	本人の好みや趣味のカレンダーの掲示は、身近に取り組める環境の整備かと思われる。今後も家族の協力を得ながら進めていかれることを期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自分で、出来る方へは、目印や張り紙を提示し、自分で出来る事への支援を実施している。どこまで出来るかは、日々のケアの中での気づきを活かし実施している。		